

4月26日 (日) 申命記 25章	「脱穀している牛に口籠を掛けてはならない」(4節)。申命記では家庭・職場・民事刑事の諸課題に信仰の実践を示す。その中で突然のこの節。「口籠」は牛が勝手に藁を食べないように口を覆う器具で、畑で働く牛にはめるのは酷である、という憐れみ深い掟。「御言葉のため労苦する者の報酬を配慮せよ」という意味で用いられる(Ⅰコリント9:9、Ⅰテモテ5:18)。
27日 (月) 申命記 26章	「今日、あなたの神、主はあなたに、これらの掟と法を行うように命じられる。あなたは心を尽くし、魂を尽くして、それを忠実に守りなさい」(16節)。今日聖書を読み、今日この語りかけをいただく。私たちには、箇条書きにされた神の掟と法はもはやない。そこから私たちを解放するため十字架で死なれ復活されたイエス・キリストに今日のこの心と魂をあずけていきたい。
28日 (火) 申命記 27章	「それに答えて、民は皆、『アーメン』と言わねばならない」(15節)。「それ」とは呪いの宣言。「偶像を安置する者は呪われる～この律法の言葉を守り行わない者は呪われる」(13～26節)。イエスはこれらの呪いを退け、「心の貧しい人々は幸いである～義のために迫害される人々は幸いである」(マタイ5:3～10)という、祝福の宣言に私たちを招き入れてくださった。
29日 (水) 申命記 28章	「彼らはすべての町であなたを攻め囲み、あなたが全土に築いて頼みとしてきた高くて堅固な城壁をついには崩してしまう」(52節)。15節からの「神の呪い」。目を覆う惨状、心潰れる苦しみ嘆きは、バビロン捕囚で実際にあったことを後日振り返って綴ったと言われる。旧約の民は「私たちはどうすれば神に従って幸いを得られるのだろうか」と問い、救い主を待った。

30日 (木) 申命記 29章	「もし、この呪いの誓いの言葉を聞いても、祝福されていると思ひ込み、『わたしは自分のかたくなな思いに従って歩んでも、大丈夫だ』と言うならば」(18節)。まさに、今日聖書を読む私たちに向けられた警告ではなからうか。特別な国民だから祝福は当然と思ひ込み、「自分たちのかたくなな思い」＝「欲」に従って歩んでいないだろうか。
5月1日 (金) 申命記 30章	「あなたの神、主はあなたとあなたの子孫の心に割礼を施し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主を愛して命を得ることができるようにしてくださる」(6節)。旧約聖書は、新約時代の預言という読みかたがある。「割礼は人の手によらず、身体ではなく心に」というモーセの預言は、この約千年後にキリストの福音が世界に広まる力の中でついに成就する。
2日 (土) 申命記 31章	「わたしには分かっている。わたしの死んだ後、あなたたちは必ず墮落して、わたしの命じた道からそれる」(29節)。モーセは自分が導いてきた民にこう言い残した。旧約聖書は、「人は神の前で清く正しく生きることはいできない。敵と戦って勝っても、自分の罪に負ける」ことを、苦難の歴史の中で告白した書、キリスト・イエスを待ち望む祈りの書ともいえる。
3日 (日) 申命記 32章	「天よ、耳を傾けよ、わたしは語ろう」(1節)、「それは、あなたたちにとって決してむなしい言葉ではなく、あなたたちの命である」(47節)。申命記最後の「モーセの歌」。荒れ野の旅を通して彼らが体験したのは、自分たちを「裁き、力づけ、殺し、生かし、傷つけ、癒す」、主の「生きた言葉」だった。今日「その言葉は私たちの命です！」と言えるようになりたい。